

10 月度 木曜例会 茨木市福祉文化会館 2020 年 10 月 1 日

Guest speaker Mr. Yann Becker (Switzerland, Lausanne)

Title < Inner Life. A Swiss Photographer in Japan / Part 2 >

10 年前に来日され、大阪の下町で暮らし
ておられるヤンさんの 2 回目の講演です。

6 歳の時、画家で写真家であった父にカメラ
を与えられ、子供のころから散歩しながら
写真を撮ったのが今につながっているよう
に感じる。

ローザンヌ大学で、舞台、デザイン、写真
を学び、フランス語が母国語である。

ローザンヌ時代は、黒澤明や今村昌平らの日本の古い映画をよく見た。

日本に来て、天下茶屋に暮らし始めたが、1970 年代の香りの残る下町が非常に
心地よかった。(現在は阿倍野に住んでいる。)

日本人は、基本的に親切で、私たちを受け入れてくれる。(特に大阪は)

現在は、日本在住で、時々、スイスに戻るとい生活であり、舞台芸術の仕事より、
写真が中心の現在である。

写真を持っての散歩や山登りが中心の生活をしており、来日 10 年記念パーティー
を先日やった。

前は”shadow”をテーマとした写真や舞台デザインのお話をしましたが、今回は
”portrait”を通して、人間の内面に迫りたいと考えた作品をお見せして、outside
life から inside life を抽出してみたいと考えました。

What is (a meaning of) life? は非常に難しい問いです。

写真でそのイメージを切り取ってみようと試みました。

Life is strong.

全ての生は、死に直面する。

悪い状態からでも必ずそれを乗り越えていく。(七転び八起き)

Life has more imagination than us.

外面に現れる情報から内面を掬いとれるように感じる。

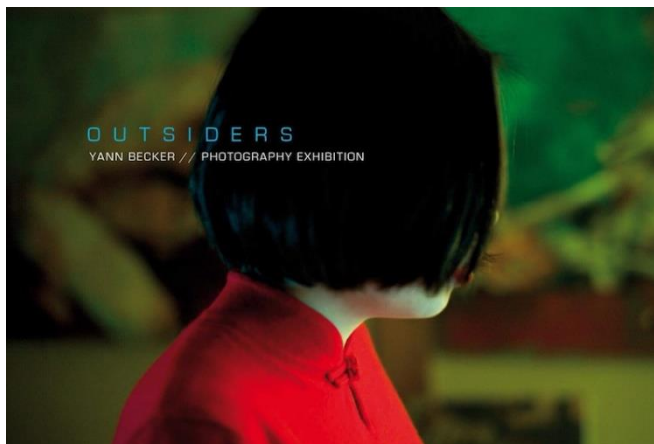


社会や生の周辺領域に生きる minority が outsider であり、ドラッグに溺れる人やホームレスの人たちが住んだ釜ヶ崎の人たちと友達になることで、多くの情報を得ることが出来た。

私自身が、日本では、日本人でないが故に outsider である。

日本では、明治・大正以前は、芸術に携わる人たちは下層階級であった。

(永井荷風の小説を読むと
そんな状況が分かるように
感じる。)



Outsider

この後、24 枚位のポートレートが次々映し出され、彼が自分の思いと共に語ってくれました。(いくつかの写真を、コピーしましたのでご覧ください)

厚化粧のバーのマダム、深夜食堂のオーナー、ドヤ街に住んでいる沖縄から来た人間性の素晴らしい男、布施近くの鉄工所に勤める画家、京都のに住むヤナギミワさんという女性アーティスト(outsider ではない)



新世界の立ち飲み屋で会った髭の男、中国の北京であった黒服の帽子のフランス男、大衆演劇の楽屋で撮った 15 歳の少女、釜ヶ崎で会った刺青のチンピラ風の男、新世界で会ったフランス人夫婦、イングロさんというカフェを営む写真家、いかにも bad boy のヤンキーな鶏の骨をネックレスにした男(いい奴)、ギタリスト、顔を塗りたくったコスプレの女、イワタニさんという離婚歴 2 回の帽子の男、東京在住の写真家、プラハで会ったサーカスの猛獣を相手にする鋭い目の男、タバコをふかすスカンディナヴィア人、オガワさん などなど。

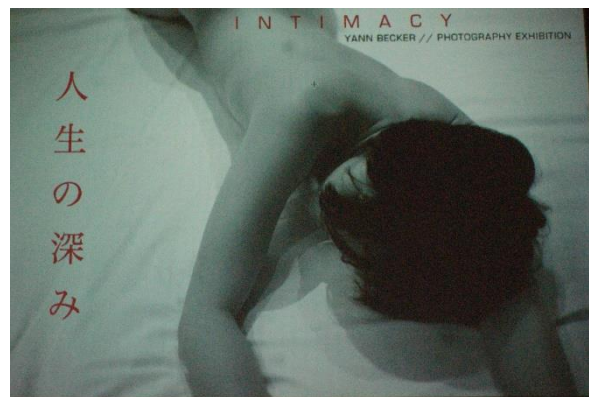




(この部分は、彼の話と写真で皆さんが感じられたことがすべてだと思います。)

Intimacy

Intimacy (人生の深み) と題して
いくつかの写真を見せられました。
ヌードの女性、タトゥーの女、
全身刺青のヤクザの男、
タトゥーの入った男女のヌード、
オーストリア人と日本人の女、
足の裏に Status, Honor と刺青を
入れた若い女性写真家、



(こちら、何をヤンさんが発信したいかを自分で感じ取るしかないと思います。
なお、Intimacy という言葉は、親密とか親交という意味のようですが、どちらか
というと性的な関係を意識して使うことが多いようです。)

なお、ヤンさんは奈良で日本人の友人と一緒に写真展を開催されます。

